

上信越高原国立公園（じょうしんえつこうげんこくりつこうえん）は1949年に設立された。2020年現在、国内で4番目に広い国立公園であり、面積は148,194ヘクタールで、群馬（ぐんま）県、新潟（にいがた）県、長野（ながの）県にまたがっている。日本の国立公園の制度は1931年に設立された。上信越高原の多様な景観と、様々な野生の動植物は、「我が国を代表する景観」という国立公園の定義にまさしく当てはまるものである。公園内には、南の浅間山（あさまやま）（2,568m）や北の苗場山（なえばさん）（2,145m）といった堂々たる山々のほか、火口湖や緑豊かな沼沢地、爽やかな高原地帯、数多くの温泉などがある。公園の自然環境の途方もないスケールと多様性にちなみ、山と高原もあるこの地域は、ハイキングやスキー、キャンプなどのアウトドア活動を行える「アウトドアレクリエーションワールド」と呼ばれることもある。

谷川連峰（たにがわれんぼう）は群馬県と新潟県の県境にまたがっている。谷川岳（たにがわだけ）の2つの峰であるオキノ耳（1,977m）とトマノ耳（1,963m）は、かつては神道の神が住む場所として考えられていた。南から見ると、この2つの峰は猫の耳にそっくりで、それが「耳ニツ」という名前の由来になっている。谷川連峰は約440万年前に隆起し始め、その後、水や雪、氷河の移動による浸食作用によって特徴的なU字谷が作り出された。この過程で出来上がった山肌は険しくごつごつとしているため、自生する動植物にとってこの連峰は厳しい環境となっている。

谷川岳（たにがわだけ）（1,977m）自体は、同国立公園内の他の多くの峰々より比較的標高は低いものの、登山者やロッククライマーの聖地として知られている。谷川岳周辺の岩場は「日本三大岩壁」に数えられており、20世紀初め以来、登山者の間で人気の山となっている。登山道はもともと修験者が使っていた山道で、ハイキングコースは1930年代に最初に整備された。その後、一般向け（軽装で訪れる人）、経験豊かなハイカー、そのどちらにも適した登山道も整備された。山頂に手軽に行けるようにするため、1960年には山麓と天神平（てんじんだいら）の尾根を結ぶロープウェイが作られ、設備更新がこれまでに数回行われている。